

アジア神学セミナー（担当 嶋田彩司）

①2001年12月、翌年に日韓共催ワールドカップを控えて、天皇明仁（当時）の記者会見での発言

日本と韓国との人々の間には、古くから深い交流があったことは、日本書紀などに詳しく記されています。韓国から移住した人々や招へいされた人々によって、様々な文化や技術が伝えられました。〈略〉こうした文化や技術が、日本の人々の熱意と韓国の人々の友好的態度によって日本にもたらされたことは幸いなことだったと思います。日本のその後の発展に大きく寄与したことをと思っています。私自身としては、桓武天皇の生母が百済の武寧王（ムリョンワン）の子孫であると、続日本紀（しょくにほんぎ）に記されていることに韓国とのゆかりを感じています。

*桓武天皇…在位 781～806 年。都を奈良から京都へ遷したことで知られる

*武寧王…百済の第 25 代の王（在位：502～523 年）

*続日本紀…日本書紀に続いて編纂された正史。797 年に完成

②『続日本紀』

高野新笠（たかののこいがさ）：光仁天皇夫人、桓武天皇生母について

皇太后姓は和氏、諱は新笠…後の先は百済武寧王の子純陀太子（じゅんだたいし）より出ず

◆神道：神道の語が指し示すものは多義的である。正月に神社に参拝したり、地域のお祭りで神輿を担いだりするものも神道的な祭祀儀礼であり、江戸時代末に生まれたいくつかの宗教、たとえば天理教なども、教派神道という名称で神道の一部に含められることがある。ただし、ここでは、天照大御神を祖先神として祀り、その子孫たる天皇を国家の中心とすべく体系化され、制度化されたイデオロギーと定義する。

◆復古神道：江戸時代の中期以降、国学という学問に携わった人々によって唱えられた復古主義の皇国思想をいう。古代の日本に仏教や儒教が伝来し、社会に普及することにより、日本人が本来もっていた精神を失ってしまったと考え、失われたその古き良き日本的な精神を今こそ取り戻すべきだと主張する。本居宣長（もとおり のりなが 1730～1801）により大成され、平田篤胤（ひらたあつたね 1776～1843）に引き継がれた国粹主義的な思想であり、近代日本のアジア侵略の基盤となった天皇の神格化におおきな影響を与えた。

③『直毘霊』（なおびのみたま 1790 年『古事記伝』所収）

皇大御国（すめらおおみくに）は、掛（か）けまくも可畏（かしこ）き神御祖天照大御神（かむみおやあまてらすおおみかみ）の御生（みあ）れ坐（ま）せる大御国（おおみくに）にして、万（よろ）づの国に勝（すぐ）れたる所由（ゆえ）は、先（ま）づここに著（いちじる）し。国といふ国に、此（こ）の大御神の大御徳（おおみめぐ）み被らぬ国なし。

（現代語訳）我が日本は、その名を口に出すこともおそれ多い神のなかの神である天照大神がお生まれになった国であり、（日本が）他のどの国よりも優れている理由は、このこと（天照大神が日本に生まれたという「事実」）ひとつとっても明らかである。世界中の他の国はすべてこの天照大神の恩恵に浴しているのだ。

④同上

御代御代（みよみよ）の天皇（すめらき）はすなはち天照大御神の御子（みこ）になも台坐（おおま）します。故（か）れ、天つ神の御子とも、日の御子とも申せり。

（現代語訳）代々の天皇様は、天照大神のお子様でいらっしゃる。だから、天皇様は世界を支配する神の後継者であるとも、太陽のお子様であるともいうのだ。

⑤網野善彦『日本の歴史をよみなおす』

（考古学者渡辺誠氏らが）朝鮮半島の東岸と南岸から、対馬、壱岐、北九州などにかけての地域に共通した文化〈略〉特有の石器を使う漁撈民の文化があったことを証明されました。〈略〉この文化は、やがて沖縄から山陰、瀬戸内ともかかわりを持つようになるとのことですが、縄文時代以来、海を通じて朝鮮半島と日本列島の間にきわめて広域的な人の往来のあったことが、これによってはっきりわかったわけです。

⑥ 司馬遼太郎『街道をゆく 2』

日本神道というこの特異なシャーマニズムにおけるその古代的原型が対馬と壱岐に存在し、対馬神道とか壱岐ト部（うらべ）氏という古代シャーマンの存在がいまなおその専門の世界でやかましくいわれていることを〈略〉考えた上で、われわれはちょっと想像を働かすだけでいい。そのほんの鼻さきに朝鮮があるではないか。神道というものの原型が、朝鮮からきたか、表現を変えれば共通の時期があったと想像することは、想像ということばが大げさなほどに自然なことである。

◆神道の語が日本の歴史書にあらわれるのは『日本書紀』の孝徳天皇（在位 596～654）の条で、「天皇〈略〉仏法を尊び、神道を軽（あなずり）たまふ」（天皇は仏教を大切に、神道を軽んじている）とある箇所とされている。前後の文脈から、ここにいう「神道」は伝統的な祭祀儀礼を指すものと思われるが、それはともかく、記録にあらわれたその最初において、すでに天皇は神道よりも仏教に傾斜していると明記されている。歴史的な事実在即しているなら、587年、蘇我と物部という有力貴族の二大勢力が対決し、仏教擁護派の蘇我馬子が勝利したことにより、仏教は国家鎮護の宗教となってゆく（明治天皇以前の歴代の天皇の多数が熱心な仏教徒であった）。

◆それゆえ神道は、江戸時代になるまで、仏教の影響下におかれ続ける。それは本地垂迹（ほんじすいじゃく）という言葉であらわされる。すなわち仏教を主とし、神道を従とするという意味である。具体例をあげれば、神道の天照大御神は仏教の大日如来（平安時代の仏教では最高仏とされる）の化身だとするような説があり、神と仏をひとつにしてしまうという意味で神仏習合とも呼ばれる。日本では長い間、神道は仏教をひとつの拠り所として、命脈を保ってきたのである。

◆神道は、江戸時代になってからは儒教と結びついた。これを儒家神道という。江戸幕府の公的な思想（朱子学）の教学上の責任者であった林羅山（1583～1657）は儒教に神道的な要素を接合して国民への普及を試みたり、民間の学者も多くが朱子学の理論でもって神道を解釈したりした（山崎闇斎の垂加神道など）。

◆国学者の復古神道は、神道を仏教・儒教から引き剥がし、独立させようとする試みと解することができる。宣長は要約すれば、次のように主張する。

『古事記』によれば、天照大御神はこの日本に生まれた。いまも日の神として世界を明るく照らしている。つまり日本は世界の盟主たるべき国なのだ。そして天照大御神の子孫が天皇である。我々はその天皇を崇拝し、神国日本を再生しなければならない

◆『古事記』は712年に完成したとされる日本で最も古い歴史書。720年に編纂された『日本書紀』のように勅

撰の正史ではないが、天武天皇（在位673～686）の指示によって編纂作業が始動した国家的なプロジェクトとして作成された歴史書である。宣長はこの『古事記』の研究に没頭し、瞠目すべき成果をあげた。それは忘れ去られていたこの書物を発掘し、その読解に成功したことである。そして、三十年間にも及ぶ『古事記』研究の過程で宣長が修得した研究の方法論は、その後の日本における文献学、言語学、文学の高度な基盤となった。宣長の人文学に対する貢献は極めて大きい。しかし…

⑦『阿刈葭』（あしかりよし）…本居宣長と上田秋成（1734～1809）の論争を収めた書物

〔上田秋成〕

日神の御事、四海万国を照しますとはいかが。〈略〉ここに阿乱它国（おらんだ）の〈略〉地球之図といふ物を閱（み）るに〈略〉吾（わが）皇国は〈略〉ただひろき池の面にささやかなる一葉を散しかけたる如き小嶋なりけり。然るを異国の人に対して、此小嶋こそ万邦に先立て開闢（ひらきあけ）たれ、大世界を臨照（のぞみてらし）まします日月は、ここに現しましし本国也。因て万邦悉（ことごと）く吾国の恩光を被（こうむ）らぬはなし〈略〉と教ふ共、一国も其言に服せぬのみならず、其如き伝説は吾国にも有て、あの日月は吾国の太古に現はれまししにこそあれと云争んを、誰か截断して事は果すべき。

（現代語訳）日の神のこと、世界中を照らしているとはどういうことか。〈略〉オランダの地球図という物を見れば、日本は大きな池に浮かんだ小さな葉っぱのようなものだ。それなのに、外国人に対して、この小さな島こそもっともはやく開かれたのであり、世界を照らしている太陽や月は、この日本から生まれたのだ。だから世界中の国々が我が国の恩恵を受けている〈略〉のだと言っても、誰もそんなことには納得しないどころか、そんな伝説は私の国にもあって、だからあの太陽や月は遠い昔、我が国に生まれたのだと主張して言い争いになったとき、どちらが正しいといえるのだろうか（どちらも正しいとしか言えないのではないか）。

〔本居宣長〕

万国の図を見たることをめづらしげにことごとしくいへるもをかし。かの図、今時誰か見ざる者あらん。又皇国のいとしも廣大（こうだい）ならぬこともたれかしらざらん。凡て物の尊卑美悪は形の大小のみによる物にあらず。〈略〉抑皇国は四海万国の元本宗主たる国にして、幅員のさしも廣大ならざることば〈略〉必さて宜しかるべき深理のあることなるべし。其理はさらに凡人の小智を以てとかく測り識べきところにあらず。かくいはば又例の不測に託すといふべけれど、不可測なることは不可測といはで何とかいひむ。不可測をしひて測りいはむとするは、小智をふるふ漢意の癖也。〈略〉信ぜん人は信ぜよ。信ぜざらん人の信ぜざるは又何事かあらん。〈略〉正しき古典に載て伝はり来たる古説を、皇国の人としてかくいひおとすべきことかは。

（現代語訳）地球の地図を見たことを珍しげに騒ぎ立てるとは愚かではないか。そんな地図を今時見たことがない人間なんていない。また日本の国土がさして大きくないことも皆知っている。ものの価値は大きさだけで決まるものでもないだろう。〈略〉そもそも我が国は世界の盟主たるべき国であって、国土がたいして大きくないことにも〈略〉かならずや深い真理が隠されているのだ。私がこういうと、あなたたちはすぐまた不可測（不可知）を持ち出したというのだろうか、不可測なものは不可測としかいいようがない。人が知り得ないものを知っているかのようにいうのは、小賢（こざか）しくふるまう中国の悪癖と同じだ。〈略〉信じたい者が信じれば良い。信じないというに人はどうしようもないではないか。〈略〉由緒ある古典（『古事記』）に記載されていることなのに、そのように難癖をつけるとは、それでも神国日本の人間か。

◆上田秋成は文学者（『雨月物語』等の作者）として知られるが、同時に本居宣長と同じ国学者でもあった。ただし、同じ国学者といっても、ひたすら日本の古文献の解説に没頭してきた宣長と違って、秋成は中国通俗文学を白話（中国民衆の書き言葉）のまま読み書きし、朝鮮通信使と面談した経験もある。当時としての国際的な感覚をもって、秋成は宣長の神国日本の絶対化を批判（相対化）して、『古事記』のような古文献は世界の国々のどこにでもあるだろうという。そのうえで秋成は、日本に『古事記』があり、そこに記載されたアマテラス伝説を自分は信じるが、おなじく別の国の人間が自国の歴史書に記載された太陽神話を信じ、自国を世界の盟主と主張することも容認するという立場をとる。

◆このとき、宣長が秋成を論破するためには、世界の国々にそれぞれにある太陽神話のなかでも、日本のアマテラス伝説が唯一真性のものであることを示す必要がある。しかし、本居宣長にはその用意がない。そこで宣長は、次のように秋成を論難する。

信じたい者が信じれば良い。信じないというに人はどうしようもないではないか。〈略〉由緒ある古典（『古事記』）に記載されていることなのに、そのように難癖をつけるとは、それでも神の国日本の人間か

◆ともあれ、本居宣長と上田秋成の論争は、神道の復活を提唱する国学の正当性が、最後には信／不信という次元でしか決定できないものであることを露呈させてしまった。これは本居宣長の国学を学問として評価するとき、致命的な弱点であったといえることができる。

◆この弱点を克服すべく宣長の跡を継いだのが平田篤胤（1776～1843）である。江戸時代の終り頃に現れたこの人物は、たぐいまれな博識と巧妙な語り口をもって復古神道を再構成し、明治時代の国家の在り方に大きな影響を与えることとなる。

⑧『霊の真柱』（1813年）

遙か西の極（はて）なる国々の古き伝に、世の初発（はじめ）、天神（あまつかみ）既に天地を造り了（おわ）りて後に、土塊（つちくれ）を二つ丸めて、これを男女の神と化（な）し、その男神の名を安太牟（あだむ）といひ、女神の名を延波（えば）といへるが、此（この）二人の神して、国土を生めりといふ説（こと）の存（あ）るは、全く、皇国（みくに）の古伝の訛（よこなまり）と聞えたり。

（現代語訳）遙か西の果てにある国々の古伝に、世界のはじまりの時、主宰神が天地を造り終わったあとで、土まんじゅうを二つ作って、これを男女の神とし、男神をアダム、女神をエバと名付けたが、この二神が国土を生んだというのは、まったく我が国の古神話が誤って伝えられたものである。

◆先掲の宣長と秋成の論争において、秋成がは世界中に『古事記』のアマテラス伝説と同じようなものがあり、それらのどれを本物と判断できるのかという問いを宣長に突きつけた。本居宣長の一番弟子を自認する平田篤胤は、この問いに答えて、日本に伝わる神話が世界で唯一無二の真正なもの（他は「訛伝」）であることを証明しようとする。そして、そのために篤胤は、和漢の諸学問はもとより、キリスト教にまで接近し、それらから有用なものを自己に都合良く利用する方法をとった。

⑨『本教外篇』（1806年）

義の為にして窘難（こんなん）を被（こうむ）る者は、これ即ち真福にて、その已に天国を得て処死せざると為るなり、これ、神道の奥妙（おうみょう）

（現代語訳）義の為に苦難に遭（あ）った者は、すなわち真に幸福であって、その者はすでに天国を手に入れて、

不死の身となる。これこそ神道の奥義（おうぎ）である。

◆『本教外篇』は、明代の中国で宣教したカトリックの司祭マテオリッチ（1552～1610）やパントーハ（1571～1618）の著書の翻訳などが収められており、篤胤のキリスト教研究ノートと位置づけられている。

◆これが新約聖書のいわゆる山上の垂訓（イエスの弟子への教え）のコピーであることはまちがいない。マタイ伝の当該箇所には「義のために迫害されてきた人たちは、さいわいである、天国は彼らのものである」とある。注目すべきは、平田篤胤がそれをメモしただけのようでありながら、「神道の奥義」つまりこれが神道の教えのエッセンスであるとして書くことである。現代的な感覚からいえば、これは剽窃といってもよい。

◆しかし、もっと重要なことは、この剽窃まがいの模倣が単なる言葉の次元にとどまらず、その指し示す内容にまで及んでいることである。本居宣長までの国学では、死者は「黄泉国＝夜見国」（よみのくに）にいくものと定められていたが、篤胤はこれをフルモデルチェンジして、キリスト教という最後の審判（世界の終末に神が人類を裁くこと）のような死生観を「創造」してしまう。

⑩同上

人の靈魂は原（もと）より一身の主なり。形骸百体は靈魂の従役なる者なり。〈略〉形骸は土に歸し、主は自存して滅亡せず、必ず幽世に入りて、幽神のその賞罰を審判することを聴き〈略〉善人は〈略〉永々此の国土の幽世に侍（さぶら）はしめて〈略〉天上に往来しつつ〈略〉悪人は〈略〉遂に予美都（よもつ）国に逐（お）はれて〈略〉懊惱痛哭して永々身に脱せざらむ。

（現代語訳）人の靈魂は一身において主であり、肉体は靈魂の従者である。〈略〉人が死ぬと肉体は土に帰るが、主たる靈魂は存続して、かならず幽世（かくりよ 死者の世界）に入り、幽神（死者の世界を司る神）によって生前のおこないについての審判を聞くこととなる〈略〉善者は永久にこの国土とともにある死者の国にしながら天上世界を往来し〈略〉悪人は「黄泉国」（よみのくに）に追いやられて、永久にそこで苦しむことになる

◆平田神学では、生者の世界は「顕世」（うつしよ）、死者の世界は「幽世」（かくりよ）と呼ばれる。死者は生前のおこないの善悪に応じて、死後に審判を受ける。正しいおこない（「義」）をした者は、たとえ現世では報われなくとも、天国にいける。そして平田篤胤は、これが「神道の奥義」だという。

⑪同上

外国々に上帝、天帝、梵天（ぼんてん）王、閻魔王などいひて、種々の事実あるは、大国主大神（おおくにぬしのおおかみ）の分霊

（現代語訳）諸外国に上帝、天帝、梵天王、閻魔王などいって、審判をおこなう者がいろいろいるのは、すべて大国主大神の「分霊」である）」

◆篤胤は大国主大神（平田神学にいう最後の審判者）が世界各地に伝播して、上帝や天帝（中国ではキリスト教「天主」をいう）や梵天（古代インドの神）、閻魔大王（仏教やヒンドゥー教の神）になったという。

⑫同上

天地万物に大元高祖神あり。御名を天之御中主（あめのみなかぬし）と申す。始めもなくまた終わりもなく、天上に坐します。天地万物を生ずべき徳を蘊し、為す事なく寂然として（謂ゆる元始の時より高天原に大御坐す）。万有を主宰し玉ふ。

（現代語訳）天地万物にその大元となる尊い神がいらっしゃる。天之御中主（あめのみなかぬし）という。始めも終わりもなく天上世界にいらっしゃる。世界のあらゆるものを生みだす徳を積み、何も行為せぬまま存在されている（いわゆる天地開闢の時から天上世界にいらっしゃる神である）。万物の主宰神である。

◆篤胤は宣長の国学では触れられていなかった宇宙の主宰神についても、これを『古事記』等の歴史書の最初に登場する神、天御中主神（あめのみなかぬし）であると特定し、日本神話を宇宙の創成から記載された完全無比なものと主張する。これも篤胤がキリスト教から学んだもののひとつであるが、彼の神学的なレトリックでは、キリスト教が日本から学んだものだと言われられる。

◆現代的な評価からすれば、篤胤の復古神道は「無内容にして、荒唐無稽なウルトラ・ナショナリズム」（丸山真男）とされるのが一般的である。しかし、明治のはじめ頃からアジア太平洋戦争の終結するまでの期間、平田篤胤は「神道史上空前絶後の一代偉人」（山田孝夫）と評価されていた。彼は国内外の文献を貪欲に渉猟して、日本人の耳に心地よい神道を創り出したのである。

◆一例として、平田篤胤が説く死後の世界は次のように書かれる。

⑬『霊の真柱』

その冥府と云ふは、この顕国をおきて、別に一処あるにもあらず、直ちにこの顕国のうちいづこにも有なれども、幽冥（ほのか）にして〈略〉その冥府よりは、人のしわざよく見ゆめるを〈略〉顕世よりは、その幽冥を見ることあたはず。〈略〉燈火の籠〈略〉一間（ひとま）におきたらむが如く、その闇（くら）き方よりは、明き方よく見ゆれど、明き方よりは、闇き方の見えぬを以て、此差別（このけじめ）を暁（さと）り〈略〉冥府は闇く、顕世のみ明きとのことにはあらず、〈略〉実（まこと）は幽冥も、各々某々（おのおのそれぞれ）に、衣食住の道もそなはりて、この顕世の状（さま）ぞかし。

（現代語訳）あの世というのが、この世と別にあるのではない。この世の内のあらゆるところにあの世があるのだが、それはかすかでほの暗い〈略〉あの世からは、人のしていることがよく見えるのだが〈略〉この世からほの暗いあの世を見ることはできない〈略〉灯明を部屋に置いたとき、暗い方から明るい方はよく見えるが、明るい方から暗い方はよく見えないようなものだ〈略〉とはいえ、あの世がひたすら暗く、この世だけが明るいということではない〈略〉実際にはあの世も同じように衣食住はそろっていて、暮らしぶりはこの世とおなじようなものなのだ。

◆明治のはじめの日本において、「義」をもっともよく果たした者は、戊辰（ぼしん）戦争（江戸幕府を倒すための戦争）で国家のために戦い、戦死した兵士たちであった。平田神学では、死んだ人間は仏になるのでもなければ黄泉（よみ）の国にいくのでもなく、その靈魂が審判を受けて、幽世（かくりよ）にとどまりつつ、生きている者を見守ってくれる。そのかわり、生きている者は靈魂の守護を祈念して、その霊を祀る義務がある。戊辰戦争の戦死者こそは「英霊」として、国家によって祀られるべき存在となった。そのために1868年に設けられた施設が東京招魂社であり、それが今日の靖国神社である。靖国神社はまぎれもなく平田篤胤の神道の延長線上に位置する。

◆しかしアジア太平洋戦争終結の時点まで、この靖国神社は宗教施設ではなかった。

明治から敗戦時まで、平田篤胤の復古神道を母胎とする神道思想は「国家神道」という名で、非宗教であると定められた。その理由を理解する鍵は、1890年に施行された明治憲法（大日本帝国憲法）にある。明治政府は神道の国教化を実質的に強力に進めるが、その一方で、明治憲法において信教の自由を認めていた。

⑭大日本帝国憲法第28条

日本臣民ハ安寧秩序ヲ妨ケス及臣民タルノ義務ニ背カサル限ニ於テ信教ノ自由ヲ有ス

日本国民は社会の安寧と秩序の保持を妨げず、国民の義務に背かない限りにおいて、信教の自由を保障される

⑮高橋哲哉『靖国問題』（2006 年）

国家神道は一方で、伊勢神宮を頂点とする神社制度を一大国家システムとして確立し、他方では、神道の教義を天皇の国家＝皇国への忠誠と愛国心を中心とする国民道徳にまで非宗教化する。国家神道はこの結果、全国民、全宗教を自らのうちの取り込む「超宗教」となったのである。〈略〉「超宗教」としての神道、「神の道」こそ「帝国臣民の辿（たど）るべき唯一の道」であり、天皇に忠誠を誓う「皇道」としての「愛国心」であって、仏教やキリスト教を信じるのは各人の「自由意志」であってよいけれども、しかしその自由意志は決して「反抗」したり、「異議を申立て」たりしてはならない。

◆この論法は平田篤胤の復古神道のそれとよく似ている。篤胤は反儒教・反仏教であった本居宣長の国学を転換して、儒教も仏教もキリスト教も取り込みながら、それらの始源にあるものとして神道を措定した。明治政もまた、信仰や言論の自由を認めながら、それらの上位に皇国思想をおくことにより、それを絶対化した。信仰する宗教は選べても、皇国思想だけは選択の余地のない絶対的な真理であるとするのが国家神道である。

⑯久米邦武「神道は祭天の古俗」（1892 年）

何国にても神てふものを推究むれば天なり、天神なり。〈略〉日本にては天御中主〔あめのみなかぬし〕といふ。支那にては皇天上帝といひ、印度にては天堂といひ、眞如〔しんにょ〕ともいひ、欧米にてゴッドといふ。皆同義なれども、祭天報本の風俗は各異なるのみ。

（現代語訳）どこの国のものでも、神というものは究極のところ天に対する信仰、つまり天空神（宇宙の創造神）である。日本では天御中主という。中国では皇天上帝、インドでは天堂、眞如ともいい、欧米ではゴッドという。みな同じであるが、それを祀る習俗にちがいがあただけである。

⑰司馬遼太郎『この国のかたち』

（篤胤は）神道に多量の言語をあたえたのである。〈略〉奈良朝の大陸文化の受容以来、篤胤によって別国が湧出したのである

⑱堀田善衛『若き日の詩人たちの肖像』（二・二六事件の前日に上京した若者を主人公とする自伝的小説）

応用の復古神道——新渡来の洋学を応用して復古というのもまことに妙なはなしであったが——は、儒仏を排し、幕末にいたっては国粹攘夷思想ということになり、祭政一致、廃仏毀釈ということになり、あろうことか、恩になったキリスト教排撃の最前衛となる。それは溜息の出るようなものである……平田篤胤がヤソ教から何を採って何をとらなかったかが問題なんだ……復古神道はキリスト教にある、愛の思想ね、キリストの愛による救済、神の子であるキリストの犠牲による救済という思想が、この肝心なものがすっぱり抜けているんだ。汝、殺すなかれ、が、ね